



内閣府

令和3年3月25日
～美ら島の未来を拓く～
沖縄総合事務局

沖縄総合観光ポータルサイトの創設について

沖縄の観光については、コロナ禍に見舞われる以前においては、入域観光客数こそは1000万人を超えたものの、観光客1人当たりの平均滞在日数が伸び悩み、観光収入も頭打ちで、観光客の滞在日数やリピーターを増やすためにも、質の向上が求められていたところである。新型コロナウィルス感染症の収束については予断を許さないが、今後、国内観光客、そして、将来的には外国人観光客がコロナ禍以前のように回復していくことを見据え、沖縄観光の質の向上に向けた準備をしておくことが必要である。

沖縄総合事務局としては、沖縄観光の質の向上に際しては、コアな観光客を惹きつけ、沖縄を心の底から愛おしく思う沖縄ファンをいかにして増やしていくのかを念頭に検討を進めていくことが最大のミッションであると考えている。コアな観光客とは、沖縄の歴史的な文化や自然などをより深く掘り下げて理解し味わおうとする者のことであるが、そのような観光客に沖縄の持つ奥深い琉球文化や世界でも類例を見ない大自然などの魅力を十二分に堪能していただくことが出来れば、滞在日数はおのずから長くなり、何度も沖縄を訪れようとする沖縄ファン、リピーターになり得ると考えられる。

そのようなコアな観光客にとっては、既に人口に膾炙した文化財や自然を観るだけでは飽き足らず、一般的にはあまり知られていない文化財や自然を観て、沖縄の文化や自然の奥深さを更に探求したいと考えるのが自明の理である。沖縄総合事務局においては、これまで局長を先頭に、市町村施策支援室、沖縄総合観光施策推進室の室員が現場に赴いて、観光資源になり得るもの徹底した掘り起こしを行ってきているが、幸いにも沖縄県内41市町村には、市町村、引いては沖縄県民が所与のものとしていても、県外や国外の者からすると魅力的と感じるであろう文化財、自然、離島などの観光資源が、その存在すら殆ど知られず眠っていることがまた判明してきているところであり、今後は、こうした無限のポテンシャルを世に知らしめ、コアな観光客を呼び込んで、沖縄観光の質の向上につとめていくことが強く求められているところである。

ところが、初めて沖縄を訪れる観光客を対象とした既存の沖縄の総合的な観光サイトは若干数散見されるものの、コアな観光客が歴史的な文化財や自然、離島などについて事前に情報収集する際に、満足していただける総合的な観光サイトは皆無である。市町村や観光協会、民間事業者などの局所的なサイトも、その大半が有名な文化財や観光拠点の掲載にとどまっている。市町村等のホームページの中には、ごく稀に詳細な文化財や自然などを掲載しているものもあるが、写真の添付や内容の紹介がなされていなかったり、長年に渡ってメンテがなされていない事例などがあるほか、何よりも、コアな観光客には、市町

村名を把握していないと当該ホームページを閲覧いただけないという問題点がある。これでは、コアな観光客、何度も沖縄を訪れようとする沖縄ファン、リピーターを増やしていくには高いハードルがあると言わざるを得ないところである。そこで、沖縄総合事務局においては、既に行ってきている現場での視察結果を基にして、次に掲げるように、初めて沖縄を訪れる者のみならず、コアな観光客にも十分に満足いただける沖縄総合観光ポータルサイトを創設することとし、これにより、沖縄を心の底から愛おしく思っていただける沖縄ファンを一人でも増やし、沖縄観光の質の向上の一翼を担っていきたいと考えるものである。

1 ポータルサイトに掲載する内容

- ・県内 41 市町村のグスク、ガーデン等の文化財、戦跡、名勝、天然記念物、ビーチ等の観光スポットや観光関係施設、ダム、酒造所、離島など、観光資源足り得るものすべて網羅して掲載。
- ・それについて解説文と写真（複数枚）を添付して掲載（イメージは別添資料参照）。
※版権の問題もあり、当面は沖縄総合事務局職員が実際に現場を訪問した際に撮影した写真を添付するが、市町村や民間事業者等からより良い写真の提供があった場合はそれを使用。

2 開設時期

- ・沖縄総合観光施策推進室において原案を作成し、原案が出来た市町村分について、令和3年4月以降、当該市町村と協議を開始し、協議が整った市町村分から掲載を順次開始。令和3年夏頃までに41市町村の全てについて掲載し終えることを目標とする。
※先ずは、沖縄総合事務局から観光資源足り得るもの網羅した原案を市町村に提示することになるが、市町村の側においても、原案の提示を受けて、自分たちが所与のものとしていたものの魅力に気づき、沖縄総合事務局の職員が未だ訪問していない知られざる観光資源についての市町村側からの逆提案も期待。
※掲載し終えた段階で、観光庁やJNTO（日本政府観光局）との連携を検討。
※沖縄県や（一財）沖縄観光コンベンションビューロー、市町村、観光協会等のホームページなどにおいても、それぞれの意向を確認の上、リンクを貼っていただくことも検討。

3 その他

- ・ホームページだけでなく、実際に観光客が現場に訪れた際の利便性などにも考慮してスマホ版も同時開設。
- ・先ずは、日本語版を作成するが、近い将来に外国人観光客が復活することも見据え、英語などの多言語のポータルサイトにするべく再来年度予算要求を予定。
- ・市町村等の協力が得られれば、今後、地図などを添付することも検討。

お問い合わせ先（内閣府 沖縄総合事務局）

- 沖縄総合観光施策推進室（齋藤、野原） 電話：098-866-1812 FAX：098-860-2369
○沖縄市町村施策支援室（中村、仲間） 電話：098-866-0047 FAX：098-860-1025

①ヤハラヅカサ/南城市

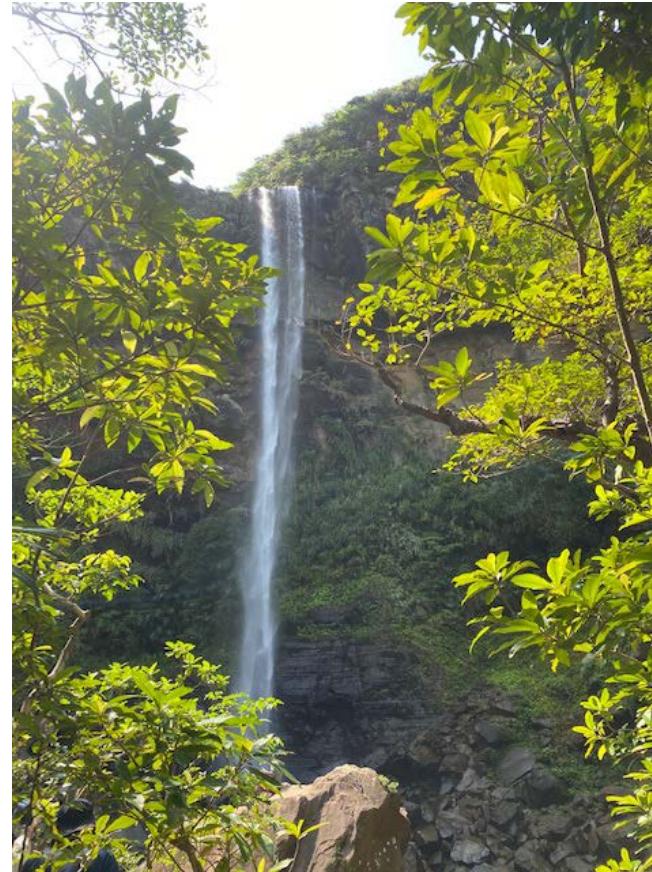
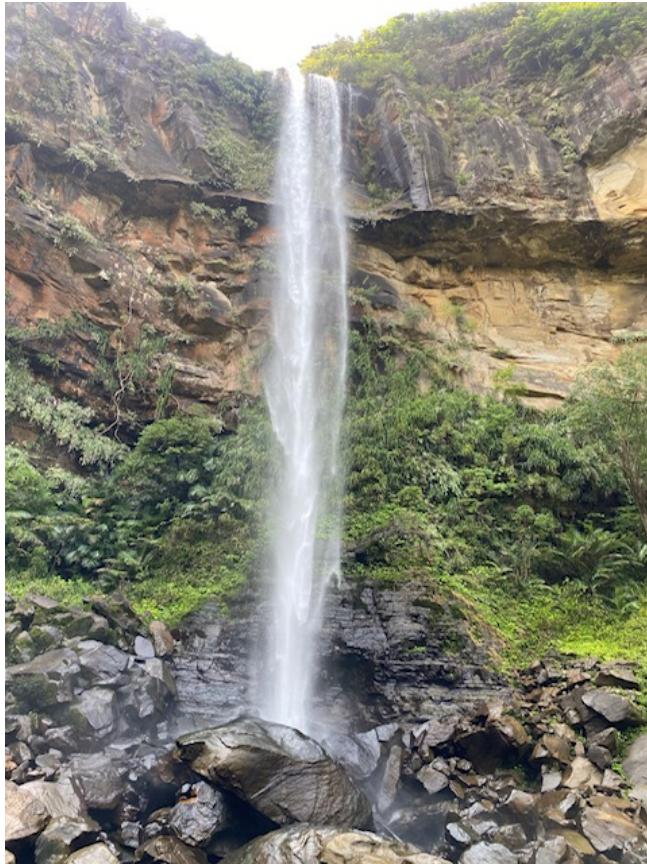
ポータルサイトのイメージ。
市町村等との協議はこれから行います。
そのまま掲載するわけではありません。



(説明)

アマミキヨが降り立った海の中に建つ聖地。海の彼方にある神々の住む理想郷「ニライカナイ」から久高島に降り立った琉球の創世神アマミキヨが、続いて沖縄本島に上陸したときに最初に足に降ろした場所とされているのがヤハラヅカサ。アマミキヨはここから浜川御嶽を経て、ミントングスク、玉城グスク、知念グスクへと歩みを進めていったと伝承されている。久高島が望める百名ビーチの北端の海の中にあり、琉球石灰岩で作られた石碑は満潮時には水没し、干潮時にその姿全体を見ることが出来る。

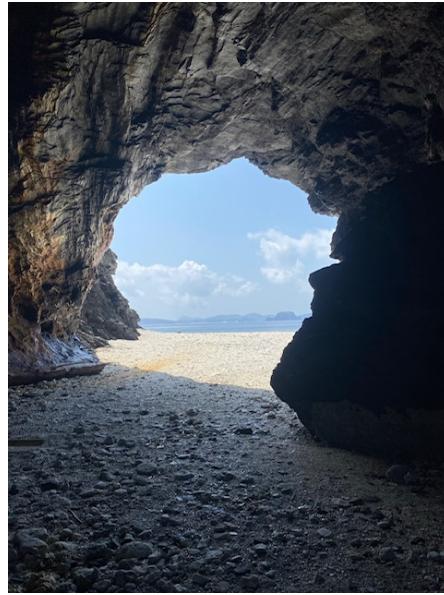
②ピナイサーラの滝/竹富町西表島



(説明)

ピナイサーラの滝は、沖縄県西表島にある滝。沖縄では珍しい、落差の大きな細い滝であり、落差は沖縄県で最も大きい。西表島の北岸近くに位置するテドウ山（標高440m）の北麓にあり、この山から北に流れ下るヒナイ川の中程にあり、幅が200m以上もある垂直の断崖から流れ落ちる滝である。滝は細い二条に分かれる。滝の真下には巨大な岩が積み重なる。落差は54mで、これは沖縄県第1位である。ピナイサーラの名は、ピナイが「顎髪」、サーラが「下がったもの」を意味する。これはこの滝の様子が白いひげが垂れ下がっているように見えることによるとされる。滝を含む岸壁は裸出しているが、周囲は全体に亜熱帯性の森林に覆われる。船浦湾からこの滝に向かうコースでは、初めは内湾の干潟、その奥にオヒルギとヤエヤマヒルギを中心とするマングローブが広がり、マングローブ後背地に生育するサキシマスオウノキ（板根で有名）が観察できる。また、コースからは外れているが、この地域のマングローブにはニッパヤシ群落がある。滝のある岸壁は海岸向きにあり、北海岸にある県道215号の船浦橋から遠望できる。ただし滝の下までの間には通常の道路はない。何らかの方法で船浦橋で区切られた内湾である船浦湾とその陸側を広く埋めるマングローブ林を通過する必要がある。干潮時であれば湾内が干潟として広く干出するため徒步で全行程を通過することも可能である。他方、カヌーや遊覧ボートを含むツアーが設定されており、満潮時前後に湾の奥からヒナイ川河口域までマングローブ内の水路をそれらで移動し、そこから滝の下まで徒步で向かうこともできる。係船地から滝の下までは徒步約15分。さらに断崖を大きく巻いて登り、落ち口まで向かうコースもある。

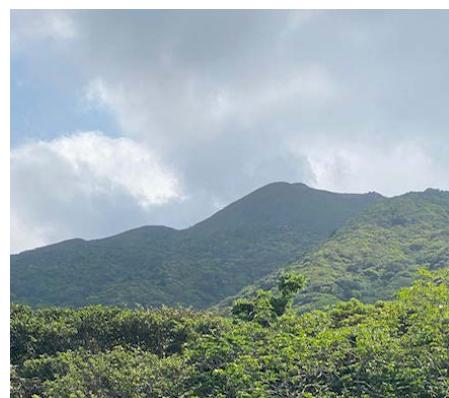
③儀志布島/渡嘉敷村



(説明)

儀志布島は沖縄本島から西へ30km、前島の西約3km、渡嘉敷島のすぐ北にある無人島。面積は約0.4591km²。外周は約4.21km、標高114m。南北に長い山地状の島で、特に島の東側は、切り立った崖が続いている。島の北端沖には無人の地自津留島（標高54m）、外自津留島（標高36m）がある。慶良間諸島国立公園の特別地域に指定されており、渡嘉敷島から続くサンゴ礁に囲まれている。「琉球国由来記」巻18には、ニライカナイ神を祀る宜志保という御嶽と、カヤウサヨキゲライという神名が記されている。昭和48年に渡嘉敷島に開所された青少年交流の家では、毎年全国から青少年を募集し、魏志布島を舞台に「無人島アドベンチャーキャンプ」というサバイバル体験を実施している。また、島の周辺は数多くのダイビングスポットがある。海の中ではキンギョハナダイ、ハナゴイ、ヤマブキスズメダイ、デバスズメダイなどカラフルな魚が群れている。真っ白な砂地が広がり、キャベツ畑のようなリュウキッカサンゴの群生がみられる。ウミガメの遭遇率がとても高く、近年では珍しいタイマイも見られることがある。

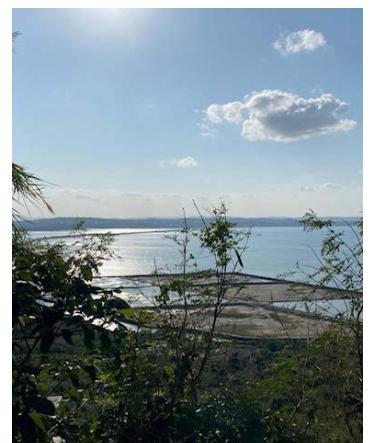
④桴海於茂登岳/石垣市石垣島



(説明)

桴海於茂登岳（ふかいおもとだけ）は、沖縄県石垣市桴海にある標高477mの山である。於茂登岳の北東約2kmに位置し、石垣島では於茂登岳に次いで2番目に高く、沖縄県では於茂登岳、与那覇岳に次いで3番目に高い山である。地質的には、新第三紀中新世の花崗岩から成る。方言ではフカイウムトウダギと呼ばれ、地元では桴海大岳（フカイフーダギ）とも呼ばれる。白保方面から見るとマンタ（ナンヨウマンタ）が空に向かっているように見えることから、「マンタ山」として、石垣市の「島人ぬ宝さがしプロジェクト」で新名所のひとつに選定されている。頂上部にはリュウキュウチクが密生する。山麓には希少な植物の群落が分布している。北麓の米原にはヤエヤマヤシ群落、東麓のンタナーラ川が於茂登トンネル入口を交わる付近にはサキシマスオウノキの群落、南西麓の荒川川付近にはカンヒザクラの自生地があり、それぞれ国の天然記念物に指定されている。

⑤平安座西グスク/うるま市平安座島



(説明)

平安座集落の後方、島のほぼ中央部に位置し、島で最も高い所（標高115m余）の琉球石炭岩上にあり、南西側は断崖となっている。野面石積みの石垣がめぐらされ、面積は約30,000m²である。築城年代は不明であるが、一説には勝連城城主の浜川按司の次男、高花按司の居城と伝えられているが定かではない。グスク内には祠があり、地域の重要な拝所となっている。『琉球国由来記』の「平安座村にある森城」はこのグスクであり、神名「島添大神之御イベ」が鎮座している。年に4回、旧暦3月、6月、9月、12月にノロや神人がグスクに登り、島の安泰を祈願する行事「御嶽廻り」が続いている、「平安座の森城」として神域となっている（うるま市指定史跡平成7年6月14日指定）。

⑥友利のあま井(ともりのあまがー)/宮古島市宮古島



(説明)

友利のあま井は、砂川地区と友利地区の境界付近で、友利元島遺跡の西側にある。自然の洞窟を水が湧き出す場所まで降りていくが、滯水層といわれる水の湧き出しているところまでは、約20mある。湧き水の規模としては大きく、水量も豊かである。1965年にこの地域に水道ができるまでは、飲料水をはじめ、生活のための貴重な水源であった。ここでも水を運ぶのは、女性や子どもたちの仕事であった。重い水を担いで、石段を登るときに手の支えとしていた場所が、岩肌のくぼみとなって残っている。

⑦嵐山展望台/名護市



(説明)

沖縄本島北部にある名護市はやんばると呼ばれる自然豊かなエリア。その名護市北部にある羽地内海（はねじないかい）を臨む高台に嵐山展望台がある。まるで瀬戸内海を彷彿とさせるような羽地内海は、しばらく眺めていたくなる沖縄らしい青い海の大パノラマ。視界にはワルミ大橋のアーチや、古宇利大橋の開通で一躍人気スポットとなった古宇利島も見える。天気が良ければさらに後方に伊平屋島、伊是名島までもを視界におさめる絶景ポイント。展望台から右手を望めば、羽地内海の先には沖縄本島最北端「辺戸岬」へと続く雄大なやんばるの山並みが続いている。この「嵐山展望台」からの眺めは万座毛や石垣島の川平湾、宮古島の東平安名崎などの名だたる沖縄絶景スポットとならぶ「沖縄八景」の一つとされている。また、沖縄の松島との異名もあり、眺めのよさとは裏腹に何故かマイナーな扱いが不思議なほどである。

⑧アンティラガマ(真壁千人塙)/糸満市



(説明)

真壁集落にある「萬華之塔」の横に続く道があり、その突き当りにある。全長約250mあり、コウモリも生息している。沖縄戦当時、このガマには地元民や他の地域の住民も多数避難し、その中には日本兵（敗残兵）も入っていた。軍民雜居の状態で力がある者が住民や負傷兵を安全な場所から危険な入り口付近へ追い出した。戦況が悪化するにつれ、日本軍の命令により住民は追い出され、砲兵部隊の陣地となった。1945年6月20日、アメリカ軍に包囲され、ガマにいた部隊は全滅した。当初、アンティラガマには水源が無いと思われており、近くにあるターチューグムイや真壁アンガーガマで水を確保しており、戦況の悪化により避難民が多くなり、ガマの奥へ追いやられたことで湧水を発見したこと。1945年7月にはアメリカ軍の火炎放射により、入口付近にいた負傷兵は全滅した。

⑨屋良ムルチ/嘉手納町



(説明)

比謝川の上流、嘉手納町と沖縄市の境の山中に屋良ムルチと呼ばれる池がある。昭和9年の観測によると、広さが715坪あったと記録されているが、戦後米軍基地の拡張工事のため約半分が埋められた。「大蛇伝説」、「ムルチ伝説」が伝わる地である。ムルチ伝説では義本王の時代に北谷間切屋良村の茂呂奇（ムルチ）という古い沼に大蛇が棲んでいて暴風を巻き起こしたり、住民に禍を及ぼしたりしていた。そこで、付近の住民は童女を生け贋として捧げ禍を鎮めていた。ある年、非常に親孝行の娘が生け贋に選ばれ、娘は悩んだが、近隣の色々の住民を救うため年老いた母を遺し生け贋となる決意をした。すると生け贋の儀式の最中に天神様が現われ、その大蛇を退治してくれた。その話を聞いた義本王は、たいへん喜びその娘を王子の妃として向かえ入れ、年老いた母と共に幸せに暮らした。この伝説を元に作られた組踊が玉城朝薰作の「孝行の巻」で、「二童敵討」や「執心鐘入」などと共に組踊りの「五番」や「五組」と呼ばれている。現在でも、屋良部落の祭事として毎年旧6月15日には御供えをして豊作を祈願している。

⑩アーマンゴンギン(観見)/南城市久高島



(説明)

この辺りにはカベールの中央カベール岬へ行く沿道にある。久高島では、アマミキヨ族のことをアーマンチュと呼んでいるが、このアーマンチュが渡来したのが、ここより北方500mほどのカベール岬の小浜であると伝えられている。アーマンゴンギンは、アーマンチューからくる呼称であると考えられる。この洞窟には、アカマターが二匹棲んでいて、捕らえてみると、それは雌雄で、一つはウミキー、もう一つはウミナイであったと言う。この観見には、ウミキー（男兄弟）とウミナイ（女姉妹）が祀られている。アーマンゴンギンの祭祀行事はない。

⑪人升田(とうんぐだ)/与那国町



(説明) 人頭税による過酷な取り立てがあった頃の人減らし策の一つとして、人升田と呼ばれる、島の中央部に位置する二反歩（約2000m²）ほどの田に島民すべてを集め、田から押し出された者を殺すということが行われていたとされる。

※人頭税による過酷な取り立てがあった頃の人減らし策：①久部(くぶ)良(ら)割(ぱり)は岩場にある幅3m、深さ7mの割れ目。かつてこの場に集められた妊婦は割れ目を飛び越えさせられ、成功者のみが生きて子を産むことが出来たと言われる。しかし無事に飛び越えても腹を強打し流産する者も多かったそうである。②人(とうん)升田(ぐだ)。ここには、昔15～50歳の男子が招集され、田に入りきれなかった者が殺されたという伝承がある。

⑫祖納集落/竹富町西表島



(説明)

祖納集落の「祖納」は、現在では「そない」と読まれているが、古い伝統的な読みでは「すね」と呼称される。祖納は、西表島で最も古い集落と言われており、古代より西表島の西部の中心として栄えてきた集落で、その歴史は500年以上に及ぶ。1479年に記された朝鮮半島の記録では、祖納集落を「所乃」と記しており、500年もの間この「祖納(すね)」の名称がほとんど変わっていないことがうかがえる。とても古い歴史を持つこの集落名であるが、その語源については、はっきりとしたことは明らかではない。

⑬ヤマシシガキ(猪垣)/大宜味村



(説明)

大宜味村の先祖は、杣山（現在村有地）と農耕地（畑）との境界に猪垣を築き、畑へのヤマシシの侵入を防ぎ、畑を守ってきた。殊に猪垣に隣接する土地の所有者は代々自分の畑を守るためにも、大宜味村全域の畑を守るためにも、自分の土地に接する猪垣を責任を持ってその保全に努め、崩れたら直ぐに補修をして猪垣を維持してきた。1776年から1782年にかけて、塩屋、屋古前田、田湊・渡野喜屋・根路銘等の住民が各むらの役人の指揮のもとに、猪垣の大々的な補修工事が行われ、高さ七尺（約2.3メートル）より四尺（約1.3メートル）の石垣を完成したところであり農閑期や月夜に石を集めてつんだとも記録されている（『球陽』尚穆王〔ショウボウオウ〕より）。そのため、1605年に野国総監が沖縄に芋苗を持ってきて、作物として定着した頃、初めて猪垣が構築されたと思われる。その後も代々の先祖は、生きるために猪垣を維持し、戦後も村民を最大動員して大宜味村全域を囲い込む猪垣の補修を行ってきた。戦後60年、今も村有地と個人有地の境界に、その猪垣が残っている。先祖は何世代にもわたって、個人としても、むら全体としても猪垣の保全に万全を期してきた。大宜味間切としては内法を定め、むら役人は猪垣を巡回し、猪垣が壊れた箇所があればそこの猪垣管理者に修繕を命じ、次に巡回したときにお修繕がなされていない者には科料米二升の拠出を命じたものであった。畑へのヤマシシの侵入は、主食であるイモやすべての作物を失うことにもなり、農民の生存にかかわることだけに、猪垣をもってヤマシシの侵入を防ぐことは農民の生きるための戦いでもあった。猪垣には村民の先祖の歴史が刻まれている。大宜味村全域を囲い込む猪垣は「十里の長城」とも呼ばれ、構築から改修・保全と大宜味村に住んでいた人々の長い歴史の証しである。村民の先祖の歴史を語ってくれる貴重な文化遺産である（所在地：大宜味村全域を囲むように喜如嘉～津波まで 全長約31km、うち字押川六田原（前ホテルシャーベイ跡地付近）～根路銘棚原山林間（上原ハキンジョウ）が村指定文化財）。

⑯登武那霸(とんなは)城跡/久米島町久米島



(説明)

トンナハ山（標高120m□）の南側斜面の中腹にある。石垣も安山岩の大石と大石の間を小さな安山岩を野面積みにして繋いでいるだけである。城内からはグスク系土器片、青磁片等がわずかに確認されている。伊敷索按司の三男（四男の説も）である笠末若茶良（がさしづかちやら）が城主をつとめたグスク（宇江城城や具志川城の城主と異母兄と言われている。）。笠末若茶良は民から慕われる人望厚い城主であったが、笠末若茶良の権勢が強まるのを危惧した父の伊敷索按司によって攻められた。この戦いは父方の敗戦に終わったが、落胆した笠末若茶良は母のいる粟国島へ向かった。しかし、船がシケにあい、かろうじて命はとりとめたが、事態を知った父にふたたび攻められ、自害したと伝わる。現在城址は「県立自然公園登武那霸園地（登武那霸公園）」として整備されている。登武那霸園地は、イーフビーチ、ハテの浜が一望できる景勝地。園地の入り口には、城を築いた笠末若茶良を讃えるおもう歌謡が刻まれている大きな自然石の碑がある。

⑯前島/渡嘉敷村



(説明)

前島は、渡嘉敷島の東約7kmに位置する南北に細長い島。方言では「メージマ」と呼ばれる。また、慶良間諸島の玄関口にあたるため「メーゲラマ」（前慶良間）とも呼ばれる。北に位置するハテ島及び中島を含む3島の総称として用いられることがある。定期航路はないが、釣り・ダイビングなどのスポットとして有名であり、訪れる人は今もなお多い。全島及び周辺海域が慶良間諸島国立公園に指定されている。第2次世界大戦以前は慶良間薪の製造やカツオ漁が盛んであり、200人ほどの住民がいた。沖縄戦では当時の渡嘉敷国民学校の分校長が

「兵隊がいなければ敵も攻撃しない」と考え日本軍の駐屯を拒絶し、日本軍側がこれを受け入れたとされる。また、米軍による攻撃の被害が少なかったのは日本軍が駐屯していなかったからとされる（この出来事は無防備地域宣言運動全国ネットワークによって、無防備の成功例として取り上げられていた。）。戦後には、南洋群島からの引き上げ等で人口が一時約380人に増加。開拓が進み、簡易水道などのインフラも整備されていった。しかし、カツオ漁が衰退すると島から移住する者が増え、1962年に発生した台風の被害によって、残った住民36名全員が沖縄本島に集団移住して無人島となった。無人の状態は長く続いたが、1980年から再び人が居住するようになった。1992年頃に再度無人化したが、その後、数世帯の島出身者が住民登録しており、2003年からは実際に居住している者もいた。2017年1月1日時点での住民基本台帳による人口は2人。2019年10月時点の実際の住民は1人（中村氏）であったが、80歳を超える高齢で、現在では誰も住んでいない。桟橋は、一昨年の台風により一部破壊された。ハブ、いのししは生息していないが、かつての住民がヤギを放牧していたことから野生化したヤギが多く生息している。